

# 序

とある絵描きが脳卒中になった。一命はとりとめたものの手に重い麻痺が残り、もとのようには絵を描けないと彼は悟った。このときのことを彼は、「命より大切なものを失った」瞬間として覚えているという。駆け出しの作業療法士が彼の担当になり、絵の描き方を教えてくれなどと言ってきた。絵の描き方を教えるなかで、彼はやがて絵筆を逆の手に持ち替え、作風を変え、絵描きに復帰した。

ここでいう命よりも大事なものがそが作業である。現在、日本の作業療法士が日々最も多く向き合っている対象が身体障害であり、骨関節・神経疾患である。これらに苦しむ人々が命より大切な作業に従事できるよう支援しようとする者のために本書を編集した。

本書は基礎編、疾患編の2部で構成される。本書の基礎編では、骨関節・神経疾患に共通し、応用性の高い事項や治療原理について解説した。このような知識・技術は、実習や臨床でクライアントと向き合う場合の根拠を提供してくれるものである。

本書の疾患編では、具体的な作業療法プログラムの解説を重視したため、作業療法評価については、特殊なものを除いて表中に示すことにした。各評価の詳細については、本書同シリーズ「リハビリテーション基礎評価学」(羊土社、2014年)などの成書をご参照いただきたい。

また作業療法プログラムでは、活動と参加領域へのアプローチを最初を紹介した後、環境、心身機能と続けるようにした。身体障害に対する作業療法のなかには、理学療法とオーバーラップする部分が少なからずあり、作業療法の専門性が曖昧になりがちである。そこで、作業療法の1丁目1番地が生活行為、すなわち活動と参加にあるとの思いから、そのような順番にした。

さらに、アクティブラーニングを前提として、事例の概要とそれに対する質問を用意した。読者それぞれが、その学習レベルに応じて、臨床思考過程を鍛えるために活用していただきたい。

最後になりますが、本書の作成には、それぞれの執筆者はもちろん、彼らが担当したクライアントの皆さん、クライアントの家族、学生、同僚などの存在が必須のものでした。また、羊土社編集部の中川由香氏、原田 悠氏の力添えなしにはここにたどり着くことはなかったでしょう。これらすべての皆様に深く感謝いたします。そして、本書に関して何かのミスがあったとすれば、すべて編者の責任と考えていますので、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

2018年12月

小林隆司